

連載

65 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義 (64歳・内科)

往診(訪問)は一発勝負! 忘れ物は致命傷

ある日の夕方午後6時ころ。松山市平井町の患者さんの訪問診療を終えたところ、別の往診依頼がありました。70歳後半の女性で、脳梗塞後遺症のある患者さんが、昼食後から胸の



辺りが辛く苦しいと言うのです。

その患者さん宅は梅津寺方面でしたので、至急、山越えのルートをとりました。そして、心筋梗塞などのおそれもあるため、心電図計を届けるように当院へ連絡したのです。患者さん宅へは、私と別便でやって来た心電図計がほぼ同時に到着しました。

しかし、心電図計のペーパーが残り10センチほどしかなく、心電図をとるチャンスは1回しかありませんでした。私は、失敗しないように全ての調整を確認し、心電図をとることにしましたが、内心びくびくものでした。心電図の検査結果は、幸い異常もなく、いつもの不定愁訴と分かり、安心したのです。同時に、ポータブルで

レントゲン検査もしましたが、胸水などの異常所見もありませんでした。

心電図検査に予備ペーパーを携帯しておくという院内マニュアルはあったものの、確認していなかったのです。大病院とはいえ半径100メートル以内の敷地ですから、時間もかからずミスのカバーなどの対応ができます。しかし、半径16キロメートル圏内という広範囲の在宅医療でのミスは、すぐには対応できず致命的になります。

改めて、頭で考える前に体が動くことの大切さについて考えさせられました。さらに、前向きな行動による失敗は、人を育み進化させることに繋がるのだなとも思いました。

患者さん宅への往診(訪問)などは、時には遠距離もあります。また、病状によっては時間との戦いであり、検査・治療に関する物品の忘れ物は、致命的です。

病院内より広範囲のエリアとなり、過去に経験したことのない感覚を味わうこととなります。例えば、儒教が時代とともに、朱子学そして陽明学と進化したように、医学医療が介護医療、そしてノーマライゼーション(デマンズ、クオリティ・オブ・ライフ)の枠内での位置付けといった視座が、すでに必要となっています。

「知行合一」—未来は実践行動によって空間が広がり、自然は困難にも前向きの人を育みます。

「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 19名
(常勤6名、非常勤13名)

内科・外科専門医 16名
(国立がんセンター勤務歴有3名)

精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
(ペインクリニック科)

**末期がん治療(緩和ケア)
相談室開設!**

Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>